



【書評】 牧野陽子著 『ラフカディオ・ハーンとの近代』 ―日本人の(心)をみつめて―新曜社刊

A5判 三九〇ページ 定価三、六〇〇円＋税

酒井 董美 ただよし

著者は成城大学名誉教授。昭和二十八年東京生まれで六十八歳。十四歳までをドイツのボンで暮らし、その後、読むにつれてぐんぐん中に惹きつけられた。著者が海外で生活してきた目で、八雲を見据え、知日外国人の著述を読み砕きつつ、柳田國男、柳宗悦、松谷みよ子、石井正己、あるいは芥川龍之介などの文献にも通じた幅広い研究業績を駆使しての分析に、有無を言わせぬ魅力があつたからであらう。

さて、ラフカディオ・ハーン、つまり小泉八雲は親日家であり、怪談を好み、言語伝承の再話に新境地を拓いた人物として親しまれている。

著者は、八雲を理解するのに、同時代の知日派、英国人チエンバレン(一八五〇～一九三五)やアメリカ人で福井で長年生活し、多くの民話を海外に紹介したウイリアム・E・グリフィス(一八四三～一九二八)や、『日本奥地紀行』を書いた英国人女性イザベラ・バード(一八三一～一九〇四)の作品を分析し、彼らが日本人の生活をよく知りながらも、キリスト教を受け入れていない事実から、日本は西洋よりも程度が低い国だとする点が八雲と異なると断定している。

それに対し、時代は第二次大戦前と下るが、英国大使の妻キヤサリン・サンソム(一八八三～一九八一)の著書『東京暮らし』、『ジョージ・サンソム卿と日本』を紹介し、彼女のように、先入観や一方的判断を排した「あるがままの観察」を通して、共感を寄せるだけでなく、互いの違いについては割りきることが、それぞれ、文化の尊重につながる。異国との関係には、相手との「真の相互理解」を求める以外に、しかるべき距離感の保持もまた必要だということを、知らせてくれている。と評価している。

本著は、これまで各所で発表したのを一書にまとめられたものであるから、やや統一感に欠けるきらいはあるが、口承文芸、民俗学、文学に明るい著者ならではの鋭い筆法には感嘆させられるところも多かった。ただ、巻末の第十二章「熱帯の幻影―林芙美子『浮雲』については、文学評価としては優れていると感心させられながらも、本書のタイトルとの関連では、やや異質であり、場違いの感じがいなめない理由は、そのようなどころから来たものと思われる。

ともあれ最後まで目を離せない魅力に溢れた本書ではあつた。(元島根大学法文学部教授)